



TITLE:

近いシステム・遠いシステム

AUTHOR(S):

喜多, 一

CITATION:

喜多, 一. 近いシステム・遠いシステム. デザイン学論考 2017, 9: 19-21

ISSUE DATE:

2017-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/219155>

RIGHT:

近いシステム・遠いシステム

Systems Close to Us and Systems Far from Us



喜多 一

KITA, Hajime

京都大学国際高等教育院教授

1 近いシステム・遠いシステム

びわこ成蹊スポーツ大学の学長で前滋賀県知事の嘉田由紀子氏は「近い水・遠い水」ということを語っているⁱ。前者は近代化以前からある域内での水循環システムを、後者は近代化により整備された広域の上下水道システムを指す。同氏は、都市などで後者が不可欠なことを認めたうえで、近代化の歴史のなかで、後者は利便性で前者を凌駕したことだけでなく、前者が非近代的なものとして否定されてきたことも述べている。

嘉田氏の「近い～」「遠い～」は社会システムを考える上で、さまざまなシステムでも成り立つシステムの捉え方の視点を与える。例えば「近いたべもの」「遠いたべもの」、「近いエネルギー」「遠いエネルギー」、「近い工場」「遠い工場」、「近い行政」「遠い行政」、「近い教育」「遠い教育」などである。もちろん、現代社会では「完全な近いシステム」は考えにくいし、広域運輸のような本質的に遠いシステムであったり、観光のように、遠隔の需要と供給を結び付けることが本質であったりするシステムも考えなければならないⁱⁱ。

現代社会は他方でグローバル化が叫ばれ、他方で地域の衰退が問題視される。ここでは、嘉田氏の「近い～」「遠い～」を社会システムに一般化して捉え、まず、その対比を行ったうえで、これを単に二項対立させて捉えるのではなく、現代の文脈において新しい社会システムの在り方を考えたい。

2 近いシステムと遠いシステムの対比

tab.1は「近いシステム」「遠いシステム」を対比させる観点である。

理論的にはfig.1に示すように「遠いシステム」はその可能領域に「近いシステ

ⁱ 嘉田由紀子：滋賀県における文理連携の地域研究とその応用的政策について～研究者40年、知事8年の経験から、計測自動制御学会、システム・情報部門 学術講演会 2016 (2016)

ⁱⁱ 大手の旅行代理店に企画が委ねられれば遠いシステムであるが、これに対して観光地が企画の主体となる着地型観光への取り組みも始まっている。この場合は、いかに遠隔の需要と結合するかが課題となる。

ム」を含む。すなわち、遠いシステムとして構成可能なものに近いシステムが含まれる。であるにも関わらず、両者が二項対立的に捉えられるのは価値規範や評価基準が異なるからである。価値規範はいずれのシステムにおいてもtab.1に示したように多主体で多目的とならざるを得ないが、fig.1では図示のためそれぞれを一つの方向で描いている。近いシステム、遠いシステムの価値規範は互いにトレードオフの関係にあることを理解し、単純には統合できないが、複合的な価値規範のもと、そのトレードオフを調整するという意思決定の視点から考えることが重要である。特に次節で考察するように、情報通信技術の凄まじい進歩とそれによりもたらされたインターネットのインパクトのもとで新しい社会を考えることが可能になっている現代の文脈において、このことは重要である。

tab.1 近いシステムと遠いシステムの対比

観点	近いシステム	遠いシステム
合理性の規範	域内循環による持続可能性	分業と規模の経済性
統治メカニズム	共感、互酬、自律的規範形成	法令と市場
富の分配	平均化	集中化
能力構築と改善	ボトムアップ 限られた人員での知恵不足	中央集権的 研究開発への大きな投資
参加	包摂的・需給非分離	排除的・需給分離
利便性	低い	高い
品質	理解された不安定	無理解な安定
利用者の捉え方	自分事	他人事
拡大志向	持続性・充足性重視	利潤追求のための成長
リスク	遠いシステムへの移行 外圧への脆弱性(法や市場) フリーライダー 参加者減少による衰退 近隣との紛争	公害の発生 大規模障害 過剰投資 調達での市場、国際リスク

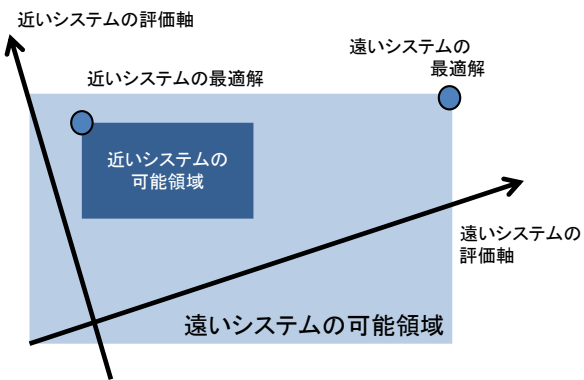


fig.1 システムの評価軸と最適解

3 限界費用ゼロ社会での社会システムの構想

先に述べた「近いシステム」「遠いシステム」の対比は、このような技術が現れる前の近代化段階で生じたものである。現代の文脈において、「近いシステム」と「遠いシステム」について対立構造を超えて考える上ではヒントが必要である。インターネットや再生可能エネルギーのインパクトを論じたものとして、リフキンの「限界費用ゼロ社会」ⁱⁱⁱがある。

マイクロエレクトロニクス革命、とりわけインターネットの出現によりMicrosoft, Apple, Google, Amazonなど世界を相手にプラットフォームを供給する巨大企業が現れている。これはある意味でサイバー社会での「遠いシステム」ではあるが、これらはそれ単独で価値を生じるものではなく、アプリケーション

ⁱⁱⁱ ジェレミー・リフキン(著), 柴田裕之(訳): 限界費用ゼロ社会—モノのインターネット—と共有型経済の台頭, NHK出版 (2015)

ョンソフトやWebサイト、販売される書籍など、さまざまな補完財と組み合わせることでプラットフォームとして超多様な活動を支えている。これにより活動範囲が狭く規模の経済性が出しにくい「近いシステム」の費用構造を大きく変えている。これがリフキンの論じる「限界費用ゼロ」でもある。さらには、プラットフォームは「近いシステム」をさまざまな意味で結合する自律分散的なシステムの媒介役をも果たしている^{iv}。

我々はこのような状況を理解したうえで「近いシステム」と「遠いシステム」を二項対立としてのみ捉えるのではなく、新たな手段のもとで、「近いシステム」と「遠いシステム」の得失を踏まえて「どのような社会を構想できるか」を考えることが求められている。

「デザイン学」への問い

- + 見えにくい「システムのアーキテクチャ」や「多面的な評価」といった視点でのデザインをどう理解してもらうのか
- + 社会の制度やシステムをその中でふるまう人の持つさまざまな特性の視点でどうデザインすればいいのか

^{iv} プラットフォームの経営学的議論については根来^v参照。

^v 根来龍之，足代訓史：経営学におけるプラットフォーム論の系譜と今後の展望，早稲田大学IT戦略研究所ワーキングペーパーシリーズ，No. 39 (2011)

^{vi} 根来龍之：プラットフォームビジネスとは，出井伸之監修：進化するプラットフォーム，角川インターネット講座11，角川学術出版（2015）